場

12画

ジョウ（ヂャウ）
ば・にわ

易（よう）は玉（ぎょく）（日）を台（一）の上に置き、玉の光が下方に反射する形。易は霊の力を持つと考えられた玉によって、人の精気を盛んにし、豊かにする魂振（たまふ）りの儀式をいい、その儀式の行われるところを場という。また神を祭るところを場といった。

（白川静「常用字解」平凡社 より）

淡座

江戸にまなび、音と言葉のあわいをえがく

淡座（あわいざ）は、現代音楽、クラシック音楽、日本の芸術文化を行き来し、文化の古今と東西をつなぐことを目的とした、クリエイショングループです。

私たちは、様々な日本の文化のなかでも、とりわけ、江戸文化から学ぼうとしています。江戸文化独自の発想のもと、「形のないもの、目に見えないもの」、つまり、言葉、文化、哲学、思想など、ひとの生活を豊かにするものの在り方を模索し、作品や演奏として発信しています。

「バッハの場」今後の開催日程

2021年11月20日㊏・12月18日㊏

会場……安養院 瑠璃光堂（東京都板橋区東新町2-30-23）

詳細は、淡座ウェブサイト、SNS等で更新してまいります。

入場料：各回 2,000円（限定60席）・配信チケット：各回 1,000円

メール：info@awaiza.com ・お電話：080-4091-6491

◀次回のご予約はこちら

配信チケットのご購入はこちら▶
本日の演奏をアーカイブで
もう一度お楽しみ頂くこともできます

淡座リサイタルシリーズ Vol.2

無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ・パルティータ全曲
無伴奏チェロ組曲全曲演奏会

バッハの場（にわ） 第4回

日時　2021年10月23日㊏ 15:30開場・16:00開演

会場　安養院 瑠璃光堂

淡座 AWAI ZA

三瀬 俊吾（ヴァイオリン）
竹本 聖子（チェロ）
桑原 ゆう（作曲）

今回は、本條秀慈郎はお休みです

映像協力／株式会社たんどる
宣伝美術／桑原ゆう
主催／一般社団法人 淡座
共催／安養院

バッハの音楽は「場（にわ）」になる。
「距離を取る」ことが求められる今こそ追求する独奏で
「場」に触れ、疫病退散を祈念する連続演奏会。

淡座（あわいざ）リサイタルシリーズ Vol.2

バッハの場（にわ） 第4回

無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ・パルティータ全曲
無伴奏チェロ組曲全曲演奏会

awaiza.com

感染症対策のひとつ「人と人との接触を最小限に留めること」を逆手に取り、独奏を追求するリサイタルシリーズ。

ひと月に１回ペースの全６回公演で、三瀬と竹本が、バッハの無伴奏全曲演奏に挑戦。桑原作品を組み合わせたプログラムで、ふたりの独奏を存分にご堪能いただきます。第６回は、ゲストとして、安養院にゆかりのあるフルート奏者、瀧本実里さんをお迎えします。

各回、アフターイベントで作品や演奏をさらに深堀りし、次の回につなげていきます。第３回以降、安養院内庭園舞台での演奏も検討しており、バッハの「場（にわ）」を淡座ならではの視点で、多角的に追求する試みです。

● 曲目と解説

寒さとともに深まる「バッハの場」。いよいよ後半に差し掛かる第４回。

J.S. バッハ／無伴奏チェロ組曲 第４番 変ホ長調 BWV1010

1. プレリュード　2. アルマンド　3. クーラント
4. サラバンド　5. ブーレ　6. ジーグ

組曲第４番は、変ホ長調というフラット３つの調性が選択された。「3」は、キリスト教の三位一体を表す象徴的な数字として、バッハ自身が強く意識し、何度も作品の中に取り入れている。決してチェロで弾きやすい調性ではないが、高い精神性を持つ特別な響きが感じられる。

大きな跳躍と下行上行する８分音符が特徴的なプレリュード。スラーもつかず旋律的とはいえない音型は、何かを求め、さまよっているようだ。中間部の速いパッセージは不気味な風がふっとかすめたよう。

プレリュードの後は５つの舞曲が続く。瞑想的なプレリュードから一転、２拍子のアルマンドは朗らかで、多彩なスラーが表情豊かである。

クーラントは、駆け抜ける16分音符と転がる３連符の動きの交錯が愉しげ。後半の音の跳躍に、プレリュードが回想される。

二重奏を楽しんでいるようなサラバンドは、心の叫びや救済を感じる。

ブーレは二部構成。軽やかに転がる16分音符の動きが愉快なブーレⅠ、ちょっと一息ついて、ユーモラスな踊りを味わっているようなブーレⅡから成る。

ジーグは、８分音符が躍動感に溢れ、華やかに曲を締めくくる。隠れた旋律を見つけながら味わって頂きたい。

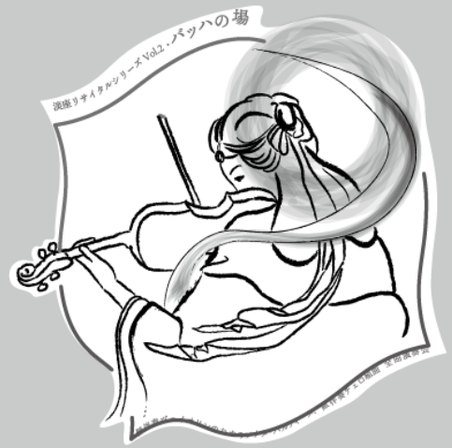
（文／竹本 聖子）

J.S. バッハ／無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第２番
ニ短調 BWV1004

第１楽章　Allemanda アレマンダ 4/4
第２楽章　Corrente コレンテ 3/4
第３楽章　Sarabanda サラバンダ 3/4
第４楽章　Giga ジーガ 12/8
第５楽章　Ciaccona チャッコーナ 3/4

バッハは各楽章の表記にフランス語とイタリア語を使っている。フランス風とイタリア風と、作品のスタイルによって使い分けていると考えられ、このパルティータ第２番はすべてイタリア語である。

全体は、「ドイツ風」を意味するアレマンダ、「流れる、走る」を意味するコレンテ、３拍子のゆったりとしたサラバンダ、速い踊りのジーガと、緩ー急ー緩ー急のテンポの順番で進み、「シャコンヌ」の名称でとりわけ有名な第５楽章で幕を閉じる。シャコンヌはフランス語、チャッコーナはイタリア語。チャッコーナだとほとんど通じないほどに、シャコンヌの名称で世の中に深く浸透しているので、ここでもシャコンヌと記載することにする。



シャコンヌとは３拍子の舞曲で、ひとつの和声進行が全体を通して続く、一種の変奏曲である。このシャコンヌの和声進行は、第１楽章から第４楽章の冒頭でも似たような形で見られ、全楽章の統一感を演出している。さらに、サラバンダの付点のリズムはシャコンヌの冒頭と同じで、第１楽章の冒頭も付点から始まっており、シャコンヌへの布石のようにも感じられる。すべての楽章が有機的であることで、パルティータ第２番がひとつの作品として成り立っており、全体像を大切にしたいと考える。

（文／三瀬 俊吾）

桑原ゆう／逢魔が時のうた（2014/17-18）

《逢魔が時のうた》は、2014年にダルムシュタット夏季現代音楽講習会のワークショップのために作曲し、二度の大きな改訂を経て、完成を見た。楽譜は、ベルリンのEdition Gravisより出版されている。

弦を極端に緩めるスコルダトゥーラは、その音程関係の必要性はもちろんのこと、三味線や琵琶の「さわり」のような効果として、豊かなノイズを含む太い旋律線をなぞるために指定している。左手ピチカートによるパルスの円環は、周期が少しずつちがうために、ずれて重なり、螺旋をえがく。その隙間を、微妙な抑揚を伴う「ふし」がたゆたう。

“逢魔が時、雀色時などといふ一日の内人間の影法師が一番ぼんやりとする時”、この世とあの世の交わるところから滲んで聴こえる、魔物たちのうた。

（文／桑原 ゆう）

補記：「バッハの場」第３回アフターイベント 庭園舞台舞踏公演
演奏構成（舞踏／伊豆 牧子・演奏曲構成／桑原 ゆう）

第２回までに演奏したBWV1002、1007、1008の舞曲から、バロック時代の組曲の構成をベースに、ヴァイオリンとチェロでなるべく交互に弾くことや調性などを考慮しつつ、新しい組曲として再構成しました。

1. プレリュード（無伴奏チェロ組曲第１番より）
2. アルマンド（無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第１番より）
3. クーラント（無伴奏チェロ組曲第２番より）
4. サラバンド（無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第１番より）
5. ブーレ（無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第１番より）
6. メヌエット Ⅰ・Ⅱ（無伴奏チェロ組曲第１番より）
7. ジーグ（無伴奏チェロ組曲第１番より）